民放連メディアリテラシー･プロジェクト 長野実践報告

東京大学大学院情報学環メルプロジェクト　林　直哉
テレビ信州　百瀬博久、平坂雄二、今村正大、湯田邦彦、小島寿一
塩尻市立丘中学校　小林清美
武蔵工業大学第二高校　河野通俊

１．　長野地区の取り組みについての概要〔林直哉、今村正大、湯田邦彦〕 ･････････････ 63
（１）長野プロジェクトの射程 ･･･ 63
（２）2001年度の実施概要 ･･･ 65
（３）2002年度の実施概要 ･･･ 66
２．　2002年度の取り組み結果
2.-1 「３分間紹介番組を作ろう」〔湯田邦彦、小島寿一〕
（１）松本筑摩高校 ･･･ 68
（２）武蔵工業大学第二高校 ･･･ 70
（３）松本松南高校（現在実践中） ･･･ 73
（４）阿智中学校 ･･･ 74
（５）梓川中学校 ･･･ 76
（６）栄中学校 ･･･ 78
（７）下諏訪中学校 ･･･ 80
（８）信更中学校 ･･･ 82
（９）山辺中学校 ･･･ 84
（10）紹介番組作りプログラム２年目の成果と課題 ･････････････････････････････ 86
2.-2 ニュースタジオを作ろう（丘中学校）〔小島寿一〕 ･････････････････････････ 88
2.-3 子供番組審議会――民放連プロジェクト 集大成番組としての指向性
〔平坂雄二、湯田邦彦〕
（１）開催経緯と企画 ･･･ 91
（２）実施から番組編集まで ･･･ 92
（３）ワークショップ完成作品の分析 ･･･ 93
（４）子ども番組審議会アンケート結果 ･･･ 95
（５）考　察――「番組」と「実践」の両立 ･････････････････････････････････････ 96
３．　２年間の全体総括
3.-1　プロジェクト実践を経て、送り手２年間の総括〔平坂雄二〕 ･････････････････ 98
3.-2　プロジェクト実践を経て、受け手２年間の総括〔小林清美〕 ･････････････････ 100
3.-3　これからの展開について〔河野通俊〕 ･････････････････････････････････････ 101
3.-4　メルプロジェクトとしてのまとめ〔林直哉〕 ･････････････････････････････ 102
４．　来年度以降の計画について〔百瀬博久〕 ･････････････････････････････････････ 105

長野プロジェクト

1　長野地区の取り組みについての概要

（1）長野プロジェクトの射程

東京大学大学院情報学環メルプロジェクト　林 直哉
（長野県梓川高校教諭）

放送局におけるメディア・リテラシー実践は、継続されながら局の血や肉となる。実践は単に送り手と受け手の循環性を持った仕掛けと、受け手自身も学ぶ包括的、総合的な取り組みが必要であると考えていた。このような実践は成果がすぐには見えるものではないが、視聴者との関係を組み替えていくために、局の足腰を「確か」にする活動であると私は信ずる。それは、イベントとして行うのではなく、日々の活動の中にこそ必要であり、「報道」から番組制作や営業活動を含む「社会における局の存在意義」に関わる企業の根の部分に存在していてほしいと考えていた。

テレビ信州で行われた長野モデルは、テレビ信州が地方局として行ってきた送り手のメディア・リテラシー活動の延長上に、受け手の想いを引き受け取り込んだ形で始まった企画である。

長野モデルの射程を簡単な言葉で表せば「長野県民のお年寄りから子どもまで、ちょっとした話題や番組を持ち込めば、何とかしてくれる局になりたい」という今村氏（昨年度局側プロジェクト担当者）が語った言葉に象徴される。

この言葉には、地方局が、視聴者とのギャップを少しでも埋め、

〇放送局の敷居を低くすること（作られた権威も含む）
〇受け手がテレビメディアの特性を理解し、うまく放送局を使おうとすること
〇地方局が、本来の意味で地域コミュニティのためのメディアになること

の３つが含まれている。現在ある意味で地域とかけ離れてしまいそうな地方局が、今村氏の言葉にあるようなメディアに変身していく営みとして、放送局におけるメディア・リテラシーの価値がある。しかし、テレビにおける送り手と受け手のギャップが一地方局の努力で短期間に埋められるものではない。一局の限界を感じながらも、現在の局と視聴者の関係では情報の送り手が努力しない限り視聴者（地域市民）とのギャップは永遠に埋まらない。実践の先頭を走るのは苦しいが、先駆者の宿命がそこにある。心配しているよりもトライ・アンド・エラーで高めていくことが重要と昨年初めに合意し、民放連プロジェクトを含むテレビ信州のメディア・リテラシーの実践は２年間持続的に行われた。様々なトラブルがあったにも関わらず、継続し発展していったことに敬意を表したい。

このように２年間続けた民放連プロジェクトは、大きく３つに分けることができる。

〇視聴者と共にテレビの特性（番組・放送それぞれの特性）について学習する実践

長野プロジェクト

〇メディア・リテラシーに関する局内研修
〇局のイメージアップと情報公開

この３本を柱にプロジェクトは進められた。この全ての活動が民放連メディアリテラシー・プロジェクトに属するわけではなく、テレビ信州が独自に進めてきた実践も多いが、この柱に沿ってテレビ信州が行ってきた企画は次のとおりである。

	企　　画	目　　的
☆	「紹介番組を作ろう」	（映像番組の特性を知る）
☆	「ニューススタジオを作ろう」	（放送の特性を知る）
☆	「番組制作のWorkbook作り」	（メディア・リテラシーの教材作り）
☆	「４回の研修会」	（送り手としての学習）
☆	「子ども番組審議会」	（プロジェクトの評価と展開）

「一つの企画を実行していったのでは総合的な成果を得られない」という危惧から、視聴率向上や局のイメージアップ、パブリックアクセスの可能性を織り交ぜながら、それぞれ異なった目的を持つ企画を有機的に結びつけて行なってきた。

既に昨年のプロジェクトに参加した視聴者には、今までのチャンネル選択（局選択）とは違った物差しで選ぶ変化が起こったことがわかっている。コンテンツを基準にした選択から、放送局に対するイメージの変化による新しい基準（応援団的な感覚）でチャンネルが選択されるようになる。だから、対象校年間10校という他から見れば驚異的な数が計画された。しかし、局側のメリットを引き出すためには、局を応援してくれる人を増やす仕掛けをフルに活かすことも必要だった。

■「紹介番組を作ろう」のねらい

長野モデルの中核をなす「紹介番組を作ろう」の意図について触れておく。この企画は、中心になる先生や生徒の学習を第一に考えた「リーダー養成型」のプログラムである。同時に「教える」立場に局の関係者が立つことを通し、送り手が自分の使っている表現技法を言語化、自分の仕事の再評価や再認識が行えることもねらっていた。つまり、実質的かつ実践的な送り手の学習も取り込み、局側のメリットも生み出したいと考えていた。

そのためには、一つの学校に長い間関わるよりも比較的少ない回数（計画では１校５回くらいの）で実行し、数を稼いでいく必要があった。学校と放送局は、お互い社会に対し今まで閉じられた組織であるため、このような交わりは「浅からず深からず」という関係で、お互いに無駄な軋轢を生まずに充実感や学びを残せると考えたからだ。入門型のプログラムと割り切り、担当の先生と中心になる生徒にスポットを当て映像表現についてノウハウを伝達し、そこから発生する学びをコミュニティに属する他の生徒と共有する設計である。このことは、私の教員という立場

と放送部を指導した経験から生まれたものである。

（２）2001年度の実施概要　　テレビ信州 今村 正大

■取り組み

「リーダー養成型プロジェクト」と位置付け、基本的には局担当者（今村正大報道部長－当時）と参加４校の先生をプロデューサーに、また生徒代表をディレクターに選び、それぞれが３分間の紹介番組を作り、局側が制作するメーキング編ＶＴＲとあわせ、夕方の情報ワイド番組「ゆうがたＧｅｔ！」で放送するというもの。

■実績

＜紹介番組作り＞

長野県立須坂高校	１年３組	「文化祭で寸劇に挑戦」
長野県立長野西高校	国際交流同好会	「料理で韓国と交流」
三郷中学校	ラーメン同好会	「究極のラーメン作り」
松本清水学童クラブ（地域の学童保育）		「野沢菜を漬けよう」

＜ニューススタジオ作り＞

三郷中学校　　＊単発番組で放送

＜ワークブックの作成＞

番組の企画から撮影やインタビューの仕方まで手ほどきする「テレビ番組のＡＢＣ」を作成した。

＜単発番組の放送＞

１年間の取り組みをまとめた番組

「一緒に作ってみたら～メディア・リテラシーの実験的実践」を３月23日に長野県内で放送した。

■手順

①企画書作成～取材テーマ、番組構成などを検討

②取材～デジカメを使い生徒の手で取材

③編集キット作り～出前授業がはかどるようパソコンを使い、粗編集する

④出前授業～局担当者の講義（テレビの構成要素＝映像、音楽、字幕など）、編集キットを使い３分の番組を完成

⑤スタジオ出演

■プログラム２年目への布石

２年目は対象校を拡大して実践することを決定。１年目の研究と平行して作業を進め、2001年

11月に県教育委員会からの後援を取り付け､12月に県内すべての中学と高校320校に案内を送付した。その結果2002年１月15日の締め切りまでに23校から番組作りに参加したい旨回答があった。

なお、2001年度の詳細は「2001年度民放連メディアリテラシー・プロジェクト報告書」（http://www.nab.or.jpからpdfファイル形式でダウンロード可能）を参照。

（３）2002年度の実施概要　　テレビ信州 湯田邦彦

「リーダー養成型」プログラム２年目は、対象校を10校に拡大し番組作りを行った。2002年１月に応募のあった学校を書類選考し、決定した10校を対象に３月に説明会を開いた。月１校のペースを予定していたが、進度の違いにより下記の通りの放送となった。

（放送）	（学校名）	（作品テーマ）
６月	私立武蔵工業大学第二高校	高校生とカップメン
６月	阿智村立阿智中学校	ぼくらのチャレンジ
７月	梓川村立梓川中学校	門柱を調べよう
８月	栄村立栄中学校	秋山探究
９月	長野県立松本筑摩高校	筑摩を創る
９月	下諏訪町立下諏訪中学校	お舟祭り時代行列奮闘記
１１月	長野市立信更中学校	究極のソバ打ち
１１月	松本市立山辺中学校	山辺ドリーム大学
１２月	私立武蔵工業大学第二高校	先生の愛車調べ　（２作目）
３月	私立松本松南高校	卒業制作ファッションショー（予定）

（＊当初計画していた長野県立長野東高校は、都合により2003年４月以降に実施予定）

■テレビ信州の体制

2002年の年間経営目標にメディア・リテラシーの実践が盛り込まれ、全社的に取り組む姿勢を打ち出した。７月には編成局長をリーダーとする「メディア・リテラシー推進プロジェクト」（総務・編成・報道の３局から10名）を設置した。

紹介番組作りは湯田邦彦（報道部デスク)、村沢圭一（報道部記者)、小島寿一（中南信報道室記者）の３人が手分けで10校を担当した。機材は10校にパソコン編集用ソフト「カノープスＥＺＤＶ　ＳＸ」を無償配付。局側には仕上げ編集用に「カノープスＤＶ－Ｓｔｏｒｍ－ＲＴ　Ｌｉｇｈｔ」を組み込んだデスクトップパソコン１台を配備。さらにデジタルムービーのない（不足する）学校への貸し出し用に、ＳＯＮＹ「ＤＣＲ－ＶＸ2000」を１台購入した。

■実施手順　（2001年度とほぼ同じ）

○ガイダンスに１時限（クラス全員に趣旨を説明、企画内容を検討）

　これは当初の計画にはなかったが、学校側からの要望で実施するケース多かった
〇粗編集（生徒が撮影した素材のキャプチュアーと粗編集）
〇出前授業に３時限（局スタッフによる授業と作品編集）
〇放送はスタジオ出演または学校からの中継

以上のステップで行った。

２． 2002年度の取り組み結果

２.－１ 「３分間紹介番組を作ろう」

（１）松本筑摩高校

所 在 地：〒390-8531　松本市島立2237　TEL0263-47-1351
実施単位：昼間定時制　映画・映像研究部 3人
顧　　問：薄井康央先生
ディレクター・編集・ナレーション：鳥羽俊介君（４年次・同部部長）
カ メ ラ：浅輪貴弘君（２年次・同部部員）

■スケジュール

☆７月２５日　ガイダンス、取材打ち合わせ（湯田・荒井カメラマンメーキング取材）
８月２８日　ステージ画作成の取材（山崎カメラマンメーキング取材）
８月３１日　文化祭の取材（山崎カメラマンメーキング取材）
☆９月１１日　編集（湯田、北沢カメラマン編集指導）
☆９月１７日　仕上げ編集（湯田、北沢カメラマン編集指導）
☆９月１９日　ニュース番組出演（於：テレビ信州松本スタジオ）
（湯田が学校訪問したのは☆の４日間、カメラマン派遣は５日間）

■番　組

タイトル（予定稿）　「筑摩を創る」
（決定稿）　「(同上)」

■制作過程

○同校は全日制、昼間定時制、夜間定時制、通信制の４つの課程からなる多部制で（県内唯一）、その特色を県民に知ってもらいたいという願いから、番組作りがスタートした。
○普段顔を合わせる機会がほとんどない４部の生徒が、年１回の文化祭で、巨大なステージ画を作り上げるという共同作業を通じ、新しい歴史を“創る”過程を取材した。
○作業の流れ
１．下絵作り
２．下絵を24枚にカット
３．全日制、昼間定時制、夜間定時制、通信制の４つの部の各クラスで色つけ
４．24パーツの絵を１つに貼り合わせ完成、文化祭で披露

■感想・反省点

（学校側）

○面白い企画だがテレビ信州に作ってもらったという感が否めない。
○もう少し長い時間で自由に作らせてもらいたかった。
○実際の放送現場に立ち会えてよかった。
○生出演でしゃべりすぎた。
○テレビに対して批判的な感情もあったけれど、実際の作業を見て効率化された作業に感心したし、テレビの問題点を現場の人たちも認識していたことにも感心した。だからテレビに対するイメージがほんの少し良くなった。
○自分の伝えたいことを心がけて撮影したが、人の表情がうまく撮れなかった。
○情報を送る側の気持ちが少しわかった気がする。

（局側）
○映画・映像研究部だけあって、撮影や編集は機材の扱いに慣れており、局側スタッフが手を貸すことはほとんどなかった。
○「出直し知事選」のため、番組構成など十分議論する時間がなかった。
○「筑摩を創る」というタイトルではちょっと見る人に難しいかなと思ったが、ディレクターの思いを尊重した。全日制の生徒でなく昼間定時制の生徒がイニシアチブをとったイベントだったところに意味があると思った。
○生出演では、鳥羽君のアドリブやゼスチュアーも飛び出し驚かされた。
○他の学校とはひと味違った特色が出ていた。

１人何役もこなした鳥羽君

作品本編より

アナウンサーの質問に答える鳥羽君

松本のスタジオ（アナは長野のスタジオ）

（テレビ信州 湯田邦彦）

（２）武蔵工業大学第二高校

所 在 地：〒399-0703　塩尻市広丘高出2081 TEL0263-52-0645（代）
実施単位：情報マルチメディア科　３年ｉ組（同科の１期生）３７人
指導教師：吉国明夫先生、河野道俊先生
ディレクター：白石潤君　　カメラ・編集：藤本直樹君
脚　本：伊藤靖彦君　　ナレーター：小林忠義君

■スケジュール

☆４月１７日　ガイダンス、班分け、取材打ち合わせ（湯田メーキング取材）
５月２０日　裏技調理取材（山崎カメラマンメーキング取材）
☆５月２４日　粗編集（湯田）
☆５月２９日　出前授業、仕上げ編集（湯田・山崎カメラマン）
☆６月　７日　ニュース番組に生出演　（於：長野市ＴＳＢ放送センター）
（湯田の学校訪問は☆の4日間、カメラマン派遣は３日）

■番　組

タイトル（予定稿）　「食のススメ」
（決定稿）　「高校生とカップメン」

■制作過程

○当初企画は高校生の食生活でファーストフードが大きなウエートを占めているが、その実態を明らかにするとともに、健康への影響を考えるというものであった。
○しかしちょっとテーマが漠然とした感じがするうえ、ファーストフードといっても種類が多いため、カップメンに絞って取材することとなった。
○はじめにどのくらいの頻度でカップメンを食べているか同校の生徒にアンケートを実施した。
○健康に悪影響といった視点で取材していたが、保健の先生へのインタビューでは「朝食抜きの生徒が多いので、何も食べないより、手軽に栄養補給できるならいいのでは」と肯定的な答えが返ってきたため構成で悩んだ。
○そこでアンケートで「よりおいしくなる裏技」を聞き、そのとおりに調理し、先生や生徒で試食するという遊び心も演出した。

■感想・反省点

（学校側）
○３分という短い時間だったが、実際作ってみると非常に難しく大変だった。
○編集にあんなに時間がかかるものとは思わなかった。
○コンビニ店のアポ取りが大変だった（本部の許可）。
○最初に考えた企画と変わったのが驚いた。
○テレビの裏側が少しわかり、ニュース等の番組の見方が変わった。
○これからは、カメラの撮り方や、何を伝えたいのか考えながらニュースを見られそうだ。

１作目「高校生とカップメン」より

２作目「先生達の愛車調べ」より

２作目９作品のコンテスト

「先生達の愛車調べ」ディレクターの成田さん

（局側）

〇最初の実践例だったので授業の進め方で苦労した。

〇カップメンという身近な題材をテーマに選んだのは良かった。

〇昼食時どのくらいカップメンを食べているかの絵がよかった。

〇放送後編集上の細かい指摘（絵と絵の間に黒味があった、アンケート結果のスーパーはバックの網掛けの色が強すぎて字が読みづらい、カップメンの陳列状況のカットは工夫が必要等）が局スタッフからあった。

〇出前授業では、実際に取り組んでいる生徒以外の生徒に、いかに興味をもたせるか苦労した。

■２作目の発表

当学科では卒業制作として全員が「ＶＴＲ番組の制作」「ＣＧ作品の出版」に取り組むことになっており、クラスを９つの班に分けて、その後番組制作にあたった。

その結果、秋に９作品が出揃い、11月13日に学校でコンテストを実施した。

全員で鑑賞して、お互いの作品を評価シートに記入し審査した。前回６月に「高校生とカップめん」を制作した白石君をディレクターとするグループが制作した２作目、「空手」は、セミプロ級の仕上がりで、上達の早さには感心させられた。ただ、なるべく多くの生徒がテレビに出演して、モチベーションを高めてもらいたいとの考えから、今回は残る８作品の中から、評

価の高かった「先生達の愛車選び」を放送した。

○９作品のタイトル名

１班　「童話シリーズＴＨＥアフロ犬」
（アフロ犬の人形を使ったコミカルな創作）

２班　「ちょーく」
（女子だけの班で、チョークをすりつぶし、何色も混ぜて別の色のチョークを作る過程をまとめた）

３班　「情報マルチメディア科」
（文字通りクラスで何を学んでいるかを紹介した作品）

４班　「愛の奥様殺しクッキング」
（いろいろな食材を混ぜて奇想天外な一品を作り試食するという作品）

５班　「プロジェクトＴＥＡ」
（好きなお茶をアンケートして、緑茶のおいしい入れ方や適温を実験）

６班　「どようこうざ」
（学校で行われている様々な土曜講座を紹介）

７班　「先生達の愛車選び」
（先生にマイカーについてアンケートしその愛車を紹介した）

８班　「高校生と自販機」
（校内にある自販機をテーマに空き缶のポイ捨て禁止や分別回収を呼びかける）

９班　「空手道～挑戦する者達」
（前回作に続く２作目。空手部顧問の先生のインタビューを中心に空手部の意気込みを綴った）

（テレビ信州　湯田邦彦）

（３）松本松南高校（現在実践中）

所 在 地：〒390-0813　松本市埋橋２－１－１　TEL0263-32-0685
実施単位：Ａ＆Ｖ（オーディオアンドビジュアル）同好会
番組制作指導：西林明隆先生（松本県ヶ丘高校教諭：県メディアリテラシー研究会）
担当教師：山田泰生先生（同好会顧問）、丸山昌子先生（服飾科担任）
担当生徒：カメラ　遠藤光子さん　ディレクター　中村綾乃さん

■企画案

松南高校服飾科。家庭科の基礎から服装デザインまでを習得するこの学科では、毎年２月に「卒業記念コスチュームショー」を一般公開の形で行っている。自分たちの思いを込めて、その材料選びからデザイン、仕上げまでを自らの手で行い、発表するこのショーはまさに服飾科３年間で学んだことの集大成ともいえる。13回目となる今年も、わずか２時間のショーのために、36人の生徒たちは１年以上もかけて準備をしてきた。番組ではこのショーの模様を中心に、卒業を目前にした生徒たちの思いを伝えたい。

■番　組

タイトル（未定）　「松南高校服飾科コスチュームショー」

■構成要素（案）

１．ショーで着る自分たちの服を選ぶ生徒たち
２．ショーに備え、歩き方、メイクの仕方などを初めて練習する生徒
３．伝統となったコスチュームショー、ＯＧも関心を寄せており指導に訪れる
４．前日のリハーサル、緊張の表情
５．ショー当日、感動的な発表を見た人たちの感想は？
６．３年間の集大成を終えた卒業生たちの思い

■放送日とスタイル

2003年３月中旬　「ニュースプラス１信州」内　10分枠
スタイル未定　ＭＣ未定

■取り組み経過

今回の取り組みは、これまでと異なり、県メディアリテラシー研究会の西林明隆先生に、番組制作については一任して実施している。ＴＳＢの指導は出前授業と、放送当日のみとなる予定。

２月８日　この日はコスチュームショーの前日の様子。リハーサルの様子を撮影する生徒を、この日初めてＴＳＢのカメラが取材（放送当日のまとめ用）。
２月９日　コスチュームショー本番。ＴＳＢカメラが取材。
※撮影が一通り終了。出前授業を経た後、西林先生を中心に編集作業を行い、３月中旬に生放送予定。

（テレビ信州 小島寿一）

（４）阿智中学校

所 在 地：〒395-03　下伊那郡阿智村伍和173 TEL0265-43-2504
実施単位：２年３組　27人
担　　任：久保田みどり先生　　副担任：大月宏先生
担当生徒：ディレクター 田中竜二君　　カメラ・編集 熊谷貴之君
ナレーター 原大樹君

■スケジュール　（総合的学習の時間を利用）

４月２２日　村役場を取材し「いま困っていること」を取材
☆４月２４日　ガイダンス（湯田、北沢カメラマンメーキング取材）
４月３０日　ＴＳＢデジカメ貸し出し、撮影指導（北沢）
５月　２日　ペットボトルラベルはがし体験（北沢）
５月　９日　ペットボトル再生工場の取材（北沢）
５月２３日　資源ごみステーションを巡回実態調査
５月３１日　編集用パソコン取り扱い指導（北沢）
６月　４日　ポスター制作（北沢）
☆６月　５日　ＴＳＢパソコン貸し出しと操作方法説明、中継下見（湯田、北沢、制作技術部）
６月　６日　ポスター村内掲示（北沢）
☆６月　８日　粗編集（林、湯田、北沢）
６月１１日　粗編集（北沢）
６月１９日　粗編集（北沢）
☆６月２１日　出前授業（林、湯田、北沢）
６月２５日　仕上げ編集（北沢）
☆６月２８日　中継の仕組み説明、中継で生出演（於：阿智中学玄関前）
（湯田の学校訪問は☆の５日間、カメラマン派遣は１４日間）

■番組

タイトル（予定稿）　「阿智村改革」
（決定稿）　「ぼくらのチャレンジ」

■制作過程

○村が今困っていることを取材し、自分たちでできることは何かを取材した。その結果、資源ごみの分別収集が大変で、ペットボトルのラベルはがしを１人の役場の担当者が黙々とこなしていることを聞き出す。
○ペットボトルが集められる集積所を取材し、ラベルはがしを手伝い大変さを実感する。
○なぜ分別収集するのか、リサイクルのシステムを学ぶためペットボトル再生工場取材。
○正しいペットボトルの出し方を知らせるポスターを制作し、村内に掲示する。

■感想・反省点

（学校側）

○ナレーションやＢＧＭで雰囲気が違ってしまうことがわかった。

○生放送でインタビューを受けすごく緊張した。リハーサルでは何度も間違えていたけれど本番では、すらすら読めてホッとした。

○きょうＴＶに出た。スッゲー緊張したけど一生の思いでができた。

○本番では「５・４」までは言ってくれるのに「３・２・１」は指なので緊張した（カウントダウンのこと）。

○先生の声が変わっていたのはびっくり。

（局側）

○長野市から高速道路を使って２時間半もかかる場所で、十分な時間を割いて作業にあたれず、学校側に負担をかけてしまった。

○現地滞在時間が限られる中、駆け足の編集になってしまった。

○スタジオだと代表の出演しかできないが、中継ではクラス全員が映るので、最後まで関心を引きつけられたのではないか。

○中継準備作業を他のクラスの生徒も興味津々で見ていた。また生徒の感想を見ると、“非日常的な授業”に中学生らしい素直な反応がうかがわれ、担当者としてもテレビ局が学校に入ることが、こんなにインパクトがあるのかと新鮮な驚きを覚えた。

■備考

○学校の取り組みを通じ、メディア教育の重要性が村議会でも話題になった。

○村の有線放送が中継日時を村内にＰＲしてくれた。

○中継現場には10人前後の父母も駆けつけ、生徒の発表を見守った。

インタビュー実技指導

学校の玄関前から中継

（テレビ信州 湯田邦彦）

（５）梓川中学校

所 在 地：〒390-1702　南安曇郡梓川村大字梓800-2 TEL0263-78-2024
実施単位：総合的な学習「梓川中学校50年の歴史探検講座」の生徒26人（１～３年）
担当教師：伊藤和子先生、矢島智実先生
担当生徒：カメラ　齋藤智樹君、川村昴君
ナレーション　細田優さん（いずれも３年）

■企画案

50周年を迎える中学校の記念事業として、校門の「門柱」を建て替えるという案が浮上したが、村民の方々から反対の声があがった。そこでこの門柱について調べると、梓川中の前にも、移転前の梓川高校、その前身の南安曇農蚕学校と、３代の違う学校の門柱として使われてきたことが分かった。こうしたことから、この門柱を大切に思っている地域の人、また門柱を作ったときの様子を知る方々を取材しようということになり､それを番組化した。講座の中で4人を、カメラ、ディレクター、ナレーターに分担（放送班とする）した。

斎藤智樹君

■番　組　タイトル「門柱を調べよう！～梓川中学校　歴史探検講座～」

■構成要素

１．「50年の歴史探検」講座の発足、学習計画を話し合っている様子
２．門柱調査班が校長先生に取材。門柱建て替えの賛否についてのお話を聞く
３．「梓川村史」や「梓川中40年記念誌」で門柱について調べるメンバー
４．昔の学校を知る卒業生に、当時の学校や校門の印象などをインタビュー
５．これまで門柱が校舎改築の度に残ったわけなどを、梓川村史編纂委員の方に聞く
６．調べてみての生徒の感想

■放送日とスタイル

2002年８月９日　「ニュースプラス１信州」９分枠

中学校教室から２カメ生中継　浅葉アナウンサーが進行役過去の番組制作の様子を２分程度のＶＴＲで振り返りながら、最後に完成した３分の番組を見た。その後全体の取り組みへの感想を話し合った。

生放送の様子

■作業日数

最初に生徒たちが取材する様子を取材した６月14日から放送日の８月９日まで約２カ月間の取り組み。７月に入り番組内容を協議のため、学校へ３回ほど赴き担当の伊藤先生と番組の内容、取材スケジュールを協議。編集作業は取材終了後テレビ信州のパソコンで担当記者が行った。先生、生徒は、放送日までにテレビ信州に２回訪れ、構成などを論議しながら編集を行った。記者としての通常業務があるため、編集作業はもっぱら午後７時からの夜間に行った。７月29日には

出前授業を行ったが、初めてのことであり、事前の素材準備やテキストつくりなどに前日５時間程度を要した。

■感想・反省点

（学校側）

○今まで普通に見ていたテレビが裏で様々な努力をしているとわかり、見方が変わった。
○限られた時間の中で自分たちが何を一番伝えたいか、考えなくてはならず大変。
○ちょっとしたスーパーやＢＧＭの違いで印象がかわることを初めて知り驚いた。
○テレビで流れているものには必ず編集が加えられていることに気をつけたい。
○インタビューで映る人間の顔の大きさでも印象が変わることがわかった。
○テレビから来る情報は一方的なので、うのみにしないようにしたい。
○テレビを作っている裏側のことも考えてみたいです。
○基本的に１回しか見せられないこと、時間が限られていることなど、テレビの大変さがわかった。

出前授業の様子

（テレビ信州側）

○実施時期が夏休みと重なり、番組の編集作業を行う時間が十分に無かったため、編集作業をまず担当スタッフが行い、学校側はすべての編集に立ち会うことができなかったのが心残り。編集をまず生徒、先生がある程度行い、悩んでもらう時間も必要だった。
○放送日本番の日にアナウンサーが現場ＭＣを務めたが、やはりこれまでの流れを知らなかったため、見た目がぎこちないものになってしまった。
○ノウハウがわからなかったせいもあるが、通常の記者業務との両立はかなり厳しく、取材の時間を削らないと満足な取り組みとはならない恐れがあると感じた。

■特記事項・成果

○ビデオ撮影、編集の各場面において、放送局としてどの程度まで生徒や先生に指導をしてよいのか判断に苦しんだ。教えすぎては学習効果が低下するし、逆に指導が不足すれば番組の質が低下し、結果的に学校側の満足度が下がるためである。
○もともと“テレビを批判的に見る目”が備わってきている現代の子供たちが、スーパーやＢＧＭなどの装飾一つ一つに、新鮮なまなざしで驚きを表現したこと、それはテレビ局側が通常何気なく行っている手法でも、視聴者には大きな印象を与えてしまっていること、また少しの演出でテレビへの見方を大きく変える「危険性」があるものだと改めて気づかされた。
○学校から生中継をしたのは大正解だった。中学生に生放送の現場を体験させることは、テレビメディアの特性そのものであり、放送を数分後に控えた緊張感など、その場に参加できたことで、生徒たちには普段味わったことのないリアルな感覚が伝わったと思う。またスタジオ出演よりも多くの生徒が画面に出られるため、地元への波及効果も大きく、放送局へのパブリックアクセスやテレビ信州へのロイヤリティーの向上に役立った。

（テレビ信州 小島寿一）

（６）栄中学校

所 在 地：〒389-2702　下水内郡栄村北信3892 TEL0269-87-2160
実施単位：科学部　14人（３年３人　２年４人　１年７人）
指導教師：宮沢栄一先生
担当生徒：ディレクター・編集 関沢明愛君（部長）、武田和樹君（副部長）
カメラ・脚本 主に武田君

■スケジュール

☆５月３１日　テーマとなるふるさと学習についてガイダンス
☆７月　９日　村を訪問した田中知事に直撃インタビュー
（たまたま知事取材中の村沢記者がその様子を取材）
☆７月２４日～２５日　秋山郷にホームステイ（メーンとなる取材撮影）
☆８月８～９日　編集用パソコンの扱いかたを局スタッフが講習
☆８月２３日　出前授業
☆８月２５日　仕上げ編集
☆９月　６日　ニュース番組に生出演（栄中学校体育館）
（村沢記者の学校訪問は☆印の９日間）

■番 組

タイトル　（予定稿）「好きです」～ふるさと栄村～
（決定稿）「秋山探究」～ホームステイで再発見～

■制作過程

○栄中学校では３年前からふるさとの良さをもっと知ろうと、村内の民家などにホームステイしている。今年度は、秘境として知られる秋山地区を訪れることになり、その模様を撮影した。
○全校生徒は80人。秋山郷に暮らす生徒６人も地元にホームステイし自然、歴史、文化など６つのグループに分かれて、実地で秋山郷について学んだ。
○ハイライトはホームステイ。自然、歴史、文化など６班に分かれて秋山郷を取材した。
○ホームステイの感想は出前授業で考えてもらった。また出来事を時系列に編集しておいて、それに続く映像は何かをみんなで考えた。
○栄村はテレビ信州がほとんどの地区で映らないため番組作りをした実感がなかった。

■感想・反省点

（学校側）
○マイクを使ってインタビューしたり大変だった。たくさんいいものが撮れた。
○カメラマンが「１秒という時間の重み」と言い残して去っていった。
○テレビはプラスチックだけどその中には効果音などいろいろあることがわかった。
○インタビューの仕方は事前に教えてほしかった。

○撮影するのにいろいろな決まりがあることがわかった。
○映像、音声、スーパーでテレビができていることがわかったが、スーパーはよくわからなかった。
○音もとても重要だとわかった。
○何気なく見ているテレビはスタッフがすごく苦労して作っている。これからはその苦労のことを考えながら見ていきたい。
○すごく撮ったのに３分間は悲しかった。

（局側）
○実質的に作業した生徒以外の生徒をいかに巻き込むかが問題。
○構成を考えるとき少し強引に誘導してしまった。
○ホームステイの前にインタビューするのを生徒が忘れ、翌日撮り直したが、再現がどこまで許されるか、生徒に教える余裕がなかった。生徒に問題意識はなかったようだ。

村沢記者による撮影指導

指導の成果！？田中知事を生徒が直撃インタビュー

番組本編より

栄村ではテレビ信州は映らないが

あえて中継に挑戦

（テレビ信州 湯田邦彦）

（７）下諏訪中学校

所 在 地：〒393-0052　諏訪郡下諏訪町上久保5480 TEL0266-27-3000
実施単位：３年４組　　31人
担　　任：山田典史先生
担当生徒：ディレクター 吉田啓之君　　カメラ 小原一起君
撮影・ナレーション 藤森あさかさん　　ＢＧＭ 田中あゆみさん

■スケジュール

☆７月１７日　　ガイダンス・取材打ち合わせ（湯田、北沢カメラマン）
　７月２２日　　町スタッフ会議取材（山崎カメラマン）
　７月２４日　　クラスの打ち合わせ（山崎）
　８月　１日　　お舟祭り本番（山崎）
　８月　９日　　素材取り込み（北沢）
　８月２４日　　粗編集（北沢）
☆９月　４日　　粗編集（湯田・北沢）
☆９月１３日　　出前授業（湯田、北沢、山崎）
☆９月１８日　　中継下見（湯田、制作技術部）
☆９月２７日　　下諏訪中学から生中継
（湯田の学校訪問は☆印の5回、カメラマン派遣は１０回）

■番　組

タイトル　（予定稿）「下諏訪町～文化の伝承」
　　（決定稿）「お舟祭り～時代行列奮闘記」

■制作過程

○町おこしの一環として十数年前に始まった「お舟祭り」にボランティアとして参加し、その活動の様子を番組化しようということに決定。
○祭りの実行委員会にクラスの代表が出席し、裏方や出演など７つの役割をもらう。
○クラス全員に担当を割り当て、決意発表。
○祭りの華を選ぶ「姫コンテスト」でも裏方として活動。
○８月１日の祭りでボランティアとして活動。

■感想・反省点

（学校側）
○熱いなか撮影したり、長い時間編集してすごく疲れた。番組を作る人は大変なんだなあと思った。
○とても貴重な体験ができた。楽しかった。
○生放送の仕組みがわかった。
○多くの人が動いてテレビができる。テレビは簡単に作れないということがわかった。

〇少しはニュースを見ようと思った。
〇もっとまじめにニュースを見始めた。
〇テレビの裏がわかった。これからは色々な視点で番組をみようと思う。
〇生徒が１つのカットに込められた意図についても考えるようになった（先生）。

（局側）
〇編集が夜９時過ぎまで及んだ日もあったが、みな熱心に取り組んでくれた。
〇町の担当者の肩書きのスーパーが小さく見えにくかった。
〇取材チーム以外の生徒も全員がボランティア活動していたので、出前授業もみんなが関心を持って参加してくれたように思う。

炎天下での「時代行列」の撮影風景

地面にカメラを置いてローアングルの撮影

作品本編より若武者役をつとめた生徒

中継の際のリードとタイトルは
ディレクターの吉田君が考えた

（テレビ信州 湯田邦彦）

（８）信更中学校

所 在 地：〒381-2351　長野市信更町氷ノ田3273 TEL026-299-2301
実施単位：２年１組　33人
担　　任：今井一仁先生
担当生徒：ディレクター 柳沢愛美さん　　編集 中澤淳基君
撮影 樋口翼君

■企画案

クラスで１年生の時、そば作りに挑戦したが、失敗した苦い経験がある（まずくて食べられなかったそうだ)。そこで教訓を生かし２年目に再挑戦し、その模様を番組にした。

■スケジュール

６月　５日　国語の授業でポスターセッション。テーマを映像でどう表現するか
１０月　４日　プレ出前授業（構成を検討）民放連・本橋氏見学
１０月１５日　出前授業
１０月１８日　そば脱穀風景取材。ＮＨＫ放送文化研究所・清川氏見学
１０月２９日　そば打ち風景取材。朝日学生新聞社・松本氏取材
１１月５～６日　編集
１１月　８日　スタジオ出演

■番　組

タイトル　　「そばを極める」

■制作過程

〇去年のそば作りの失敗について学習（インターネット情報やプロへの取材）
〇農協で畑作りについて学習
〇そばの種まき
〇生育管理
〇収穫、脱穀
〇そば打ち、試食、来年への展望

■感想・反省点

（学校側）
〇「伝えたいもの」を考え、映像でどう表現するか悩んだ。
〇番組を作っていくうちどんな映像を撮ればいいかわかってきた。
〇音や字幕を派手なものにしてしまうと見とれてしまい、伝えたいことが欠けてしまう。
〇活動をしてみてテレビの見方が変わった。ニュースとバラエティーではテロップが違う。
〇自分達の番組が視聴者に伝わったか気になった。
〇いつもはテレビを見てただ笑ったり、泣いたりしていたけれど、テレビはこうやって笑ったり、泣かせる狙いがあるのかと考えるようになった。

○テレビ局の仕事を身近に感じた。

（局側）
○カメラマンが撮影指導したのは生徒にとって大変プラスになったのではないか。
○クラス全員が５班に分かれ分担して作業した。各班ごとにカメラマンを置き、交代して全員が取り組めるよう配慮できた。
○クラスの全員から担当記者に礼状をいただきました。

おいしいそば打ちの取材

プロのカメラマンが撮影指導

真剣な面持ちでそば打ち

今年のそばはおいしくできました

村沢記者による出前授業

長野市のテレビ信州に出演した生徒たち

（テレビ信州 湯田邦彦）

（９）山辺中学校

所 在 地：〒390-0221　松本市里山辺3326 TEL0263-32-0267
担当教師：田中俊博先生、鎌倉清子先生
担当生徒：カメラ　水野安実さん　ナレーション　宮沢楓さん

■企画案

地域の人を講師と受講生に迎え、生徒と一緒に学ぶ山辺中学校の総合的な学習の時間。私たちはそれを「山辺ドリーム大学」と呼び、去年から行っている。平和教育、パソコン、温泉観光、ゴスペル、囲碁など17の学科に地域住民から280人を招き、年に10数回、子供と地域との年齢差を越えたふれあい学習を行っている。この学習は生徒の学ぶ意欲を育て、知識と共に新たな考え方を生む。通常の授業では体験できないものが多い。私たちはこの「山辺ドリーム大学」を題材に、１．大学の紹介、２．大学の楽しさ、３．地域受講生と生徒のかかわりをテーマに番組つくりを企画した。

■番　組　タイトル「地域と一緒に学ぶ山辺ドリーム大学」

■構成要素

１．ある総合的な学習「山辺ドリーム大学」紹介
２．17ある個性的な学科の紹介
３．代表的な例として、過疎化が進む地域にシンボルをとの願いから作ったツリーハウス作りを取り上げる
４．生徒と地域の人が共同して作り上げた喜びを表現
５．「自然と友情の宝庫を未来へ」ツリーハウスにこめたメッセージを伝える

■放送日とスタイル

2002年11月25日　「ニュースプラス１信州」10分枠
中学校教室から２カメ生中継
※今年度初めての試みとして担当した小島記者が進行役を務めた。

■取り組み経過

７月２日　午後授業終了後、番組編成会議。担当する先生・生徒４人、ＴＳＢ小島寿一記者、それに番組の題材となる山辺ドリーム大学の担当教諭も交えて、番組の内容を考える。

７月21日～９月28日　山辺ドリーム大学の時間を継続して取材。温泉観光学科のツリーハウスつくりを中心に、福祉学科、囲碁学科など他の学科の様子もサブ的に撮影する。ツリーハウス建設の現場を撮影、取材を行う生徒、先生をＴＳＢカメラが取材。

９月28日　撮影が一通り終了したが、素材が20時間分あるということで、映像の組み合わせ方、

並べ方などの構成面について打ち合わせを行う。

10月25日　午後２時よりＴＳＢ記者が出前授業。映像メディアの特性、テレビの構成要素（映像・音声・スーパー）を学ぶ。必ず作り手には意図があり、それを様々な手段を用いて、編集が行われ、手が加えられていることを学ぶ。「テレビの映像は事実だがそれは構成されたものである」ということ。

11月17日　３分３秒の番組が完成する。

11月25日　放送

■感想・反省点

（学校側）

○３分という枠の中で､伝えたいことが沢山ある中でどこに焦点をあて絞るのかが難しかった。

○どこで誰が何をしているかなどを常に意識して撮影するのが難しかった（カメラ）。

○たった３分の短い番組でも、編集やカメラマンとか音声さんとかの工夫と努力が背景にあるとわかった。

○ＢＧＭ、スーパーなど何を扱うにも、作成者側の意図があると感じた。

○常に「こうだったらどう見えるだろうか」と自分で手を加えたことを想像しながらテレビをみるようになった。

○電波で多くの人に伝えるので、見る側にわかりやすく伝えるという、情報の送り手側の責任は大きいと感じた。

（テレビ信州側）

○題材となった「山辺ドリーム大学」は、実際のＴＳＢニュースでも何度か扱わせていただいた。そのため、テーマや構成などを同じ立場で考えることができ、番組制作の上でスムースな意見交換が学校側と出来た。

○テレビ信州と山辺中学校の距離が車で10分以内とアクセスが比較的良かったことで、指導を行いやすかったと感じた。

○他の学校と違い、実施単位が定まっていなかった（クラスや、総合的な学習の単位でない）ため、出前授業の受講者は希望者という形となった。そのため、授業を聞いてくれる生徒とそうでない生徒がはっきり分れてしまった｡このような場合の指導対応が課題となった。

■特記事項・成果

○ＭＣを担当記者が務めたこと。当初ＭＣを私（小島）がやると申し出たはいいが、本当に10分もの枠をこなしきれるかその後になって不安がこみ上げてきた｡しかし当日は、とにかく自分たちのいわば「教え子」に対し、テレビの楽しさをできるだけ知ってもらうように、そして視聴者からも、送り手と受け手がフラットに交わっているという構図が見えるように心がけた｡それが結果的に、まったく放送当日まで中学生とかかわらないアナウンサーがＭＣを務めるよりも、話術は劣るが、説得力が増したように思う。生徒や先生から見ても、これまで半年近く一緒に接してきた人と話すことは、生放送の緊張をほぐすことにつながり、ひいては自主的な意見を引き出すことにつながったと思う。

（テレビ信州 小島寿一）

（10）紹介番組作りプログラム２年目の成果と課題

テレビ信州　湯田邦彦

【成　果】

①　学校との人脈作り

局スタッフと学校(特に先生)との人脈作りができたことが最大の収穫といってもいいと思う。武蔵工業大学第二高校では２作目も制作し､クラス内コンテストまで実施し２度の放送を行った。さらに来年度以降も取り組みたいとの意向が伝えられている。三郷中学校の小林清美先生は転任先の丘中学でも「ニューススタジオ作り」に取り組まれた。２年目はＣＭの制作も行い、多角的に取り組みを展開されていた。今回の実施校の中で、来年度も取り組みを検討している学校もあるので、継続した連携が可能となった。

②　パブリックアクセスのルート開拓

学校からはこれまでにも文化祭などの取材依頼は個々にはあるが、番組作りという大きな仕掛けは例がなく､パブリックアクセスのルートを拓いたという意味としては､一つの布石となった。とくに山辺中学校が紹介番組で取り上げた「山辺ドリーム大学」は地域に広がりを持った稀な事例であり、その後小島記者が取材を継続し、単発番組として３月１日に放送した。ソフトが不足する中、地域の話題（情報）掘り起こしという点でも、可能性の広がりが期待できる。

③　地域での認知度アップ

学校からの中継はその学校や地域に大きなインパクトを与えたのではないか。自分たちの学校から中継されるということで､他の生徒､教職員､生徒の父母や地域の人たちが注目してくれた。阿智村では村議会で話題になり、村の有線放送で中継日時を村内に告知してくれた。また下諏訪町では生徒の取り組みと放送日が地元紙に掲載された｡これらは局側から依頼したことではなく、すべて学校側からのアプローチの結果で、それだけ大きな期待があったものといえる。

④　総合的学習とのマッチング

中学校では導入された「総合的学習」のテーマ探しに多くの現場の先生が悩んでおり、タイミング的にはよかったのではないか。この授業時間を使って取材や出前授業などにかなりの時間を割いてもらうことができた。

⑤　社員の意識の変化

メディア・リテラシーに対する局側の担当者（記者やカメラマン）の意識は、取り組み前にはかなり温度差があったが、実際に取り組みが進むうちに、教えることの楽しさと難しさを感じ取っていたようだ。学校での経験は各自が担当している番組作りや、ニュースの企画に「よりわかりやすい表現」を追求する姿勢になって現れてきている。

【課　題】

①　先生との役割分担が不明確

出前授業のすすめ方で先生（受け手のリテラシー）と局側（送り手のリテラシー）の役割分担

を事前に打ち合わせる必要があったが、十分でなかった。出前授業で先生が話す時間も必要ではないか。教員養成型プログラムとしての評価がどうだったのかよくわからないまま終わってしまった。また制作に携わった生徒とそれ以外の生徒のギャップを埋めきれなかったと思う。ついて来れない生徒の切り捨てにならないか心配。

② 作業の労力とコストの問題

具体的には

○素材のパソコンへのキャプチュアーにかなりの時間を要した。局担当者が訪問した日に、本編集に入るのに３時間もかかってしまったケースもあり、遠隔地の学校で実施する場合の日常のケアに課題がある。学校側で下準備ができていないと大変な労力と時間がかかる。

○２台のカメラで撮影している学校では素材が１０時間も回っており、局担当者が全部目を通す時間がなかった。

○出前授業だけでは完パケまで持ってゆくことは無理。ほとんどの学校で編集日を改めて取り直した。

○音声レベルなど、パソコン編集だけでは実際の放送に耐えられないのが実情。局側で最終的な微調整をする手間が増えた。

○メーキング取材のカメラマンは外部委託のスタッフなので、コスト的にはかなりの金額になるのではないか。

③ ニュースで扱うことの問題点

ニュースでの扱いは時間に制約がある（タイムキープが大変）。また突発事件や事故の際、他のニュースの構成を圧迫する要因となる。実際、田中長野県知事への不信任案がどうなるかヤマ場の日に、放送がぶつかってしまいニュース枠を削らざるを得なかったこともあった。それと１０分という枠で、本編３分、メーキング２分使うと残り５分しかなく、子どもたちから十分話を聞き出せなかった。

相手は生徒なので質問は「難しかった点はどういうところですか？」「取り組んだ感想は？」というものから入らざるを得ず、アナウンサーとの掛け合いは深まらなかった。局スタッフからは「学校が変わっただけで毎回ワンパターン化している」との声もあがった。どの学校も作品を作ることに手一杯で、本番当日の演出までは学校側も局側も考える余裕がないのが実状だった。

２.-２　ニューススタジオを作ろう（丘中学校）

所 在 地：〒399-0702　塩尻市広丘野村1302 TEL0263-52-8973
実施単位：「丘中テレビ」有志の生徒15人
担当教師：小林清美先生（前年度三郷中学校教諭）
担当生徒（いずれも代表者）：
セット制作　横山雄介くん、小松瑠璃子さん
紙芝居　小松由里恵さん、吉田望花さん
キャスター　田中絹巳さん
カメラ　高野隼也くん
ＣＭ作り　上村諒くん、坂井紘紀くん

■企画案

昨年度も三郷中学校で行われた「生中継」制作企画。本年度も「民放連プロジェクト・番外編」の取り組みとして、丘中学校とメルプロジェクト林直哉さんからのリクエストを受け実施することになったもの。番組の制作だけでなく、スタジオセットの作り方や、映像、カメラの特性にまで踏み込んだ幅広い内容に、生徒たちはプロデューサー的な仕事、作業的な仕事、技術的な仕事、レポーター的な仕事などに分かれて生中継を包括的に体験した。「丘中学校らしさ」を生徒たちがどうテレビ画面に醸成するかも興味深い焦点のひとつとなった。

■番　組

生中継　メディアリテラシーミニテレビ局に挑戦！　「丘中テレビ」

■構成要素

グループに分かれてそれぞれのＶＴＲ制作、セット制作に取り組んだ
１．ＶＴＲ１　「丘中学校紹介」
２．セット制作担当者が苦労した点について感想を述べる
３．ＶＴＲ２　「塩尻市（丘中の地元）の民話を紙芝居で紹介
４．生徒が生放送のカメラマンに挑戦！2002年丘中10大ニュース。キャスターも生徒
５．ＶＴＲ３　エイズへの理解を表す丘中の特徴的活動「レッドリボン」紹介
６．ＶＴＲ４　「ＣＭ制作」　生徒がＣＭ作りに挑戦。ＶＴＲ前後に感想や苦労を聞く

■放送日とスタイル

2002年12月28日　年末報道特番内　13分枠
中学校音楽室から２カメ生中継　浅井アナウンサーが進行役（構成は上記の表を参照）

■取り組み経過

11月16日、出前授業。カメラに映ったものと実物の違い、照明の当て方による印象の違いなど映像の特性について実験しながら、１時間半程度の授業と、テレビ信州のスタジオ解剖を行った。

スタッフによる授業の様子

照明、明るさによる人物の印象の違い

本物のレモンとレプリカ
の見え方の違い

その後子どもたちは各グループに分かれて作業を進めていった。

セットのテーマは塩尻特産
のぶどうと校章のスミレ

ナレーション、ＶＴＲ撮影の様子

ＣＭ撮影の様子

撮影、取材されたＶＴＲは、テレビ信州と担当の小林先生が協議の上、編集を行った。まず学校備品のパソコンで編集したあと、音声レベルの調整などはテレビ信州で行った。放送日の３日間は学校にＴＳＢ記者が通い、編集作業した。

■感想・反省点

（学校側）

〇テレビはセットなど見えていないところの方が大変で、これからはもっと細かいところまで見るようにしたい。

〇テレビに出たことで、普段見ている番組もじっくり見るようになった。

〇裏ではどんなことをやっているのかと考えるときがある。

〇アナウンサーの浅井さんにあえてよかった。テレビに出てないか確かめている。

〇本当にこれがテレビ放送をされているのだろうかと思った。

〇準備の段階では本当にできるのだろうかと心配していたが、何とか成功させることが出来てよかった。

（テレビ信州側）

○子供たちが生中継のスタッフとして、出演者として13分の放送を成し遂げたことで、生徒たちの顔にも充実感が広がり、それを見た我々も番組制作や、生中継の楽しさが伝わったと感じた。
○局のアナウンサーと一緒に生番組に出たことで、お互いの距離が縮まり、親近感が高まったことが良かったと思う。放送の裏側や放送局の「人」に新鮮な驚きをもって、共感してくれたのが良かった。
○出来れば少し余裕を持って撮影を進め、生徒に編集を体験させたかったが、時間がなく、先生と局スタッフで進めてしまった。ＶＴＲが編集されていく過程で「構成」「切り取り」など映像メディアの特性に気づいてもらうという、今年度行っているメディア・リテラシー事業による効果を、生徒に味わってもらえなかったことは残念。
○セット作りやＣＭ作りなどが楽しかった反面、大変だったという印象が強く、「もうやりたくない」と吐露している生徒がかなり多かったのが、局スタッフとしては残念だった。しかし映像の特性について授業を受けたこと、また生中継にかかわったことが体験として残ってくれればいいと思う。

■特記事項・成果

セット作り、ＣＭ作りなど、普段我々放送局スタッフもそれほどかかわらない分野での指導は、若干限界を感じた。それらすべてに自信を持って指導することは困難である。しかしある程度、基礎的なことは教えることができた。生徒たちも、「やるまでは不安だったが成功してよかった」と、自分たちの願いが実現、達成した喜びを感じている。その喜びを持続し、テレビは人間が作っているということ、そして、自分たちも「情報の送り手」に、テレビ信州を通じてなれたということを、ずっと覚えていて欲しい。

（テレビ信州 小島寿一）

2.-３　子供番組審議会――民放連プロジェクト　集大成番組としての指向性

テレビ信州 平坂雄二・湯田邦彦

（１）開催経緯と企画

■発想・企画の原点

無謀にも当初、「生放送」を想定していたこの番組は、民放連プロジェクトには組まれていなかった。１年目を経て２年目の計画を策定した際に漫然と抱いた「足りない何か」を補うものだった。それは、全体として集約された検証という形にあった。「底辺の拡大」を指向していたテレビ信州プロジェクトは、広くメディア・リテラシーを周知する初期の戦略として正解だった。しかし、実践対象校が多くなればそれだけ「やっただけ」に終始してしまい、散発的な成果にとどまる危険性をはらんでいた。「プロジェクト全体像としての成果を見る方法はないか」。そんな思いを企画意図に反映したのが、プロジェクト実践校の生徒たちを対象にした「子ども番組審議会」のイメージだった。

■リテラシーが試された企画検討

番組内容を具体的に検討し始めたのが2002年11月下旬。既にコーディネーターをメルプロジェクトメンバーで愛知淑徳大学講師の小川明子さんにお願いすることは決まっていたが、分かり易い番組イメージが災いして立ち上がりが遅れた。その上、検討が具体化するに従い初めて体験する“形態”の番組であることを痛感。局メディア・リテラシー推進プロジェクトの企画検討会議は揺れた。番審のテーマ作品をニュースにする方針は何とか決まったのだが、番組的仕掛けが問題となった。

「生徒たちの活発な議論を促すため、テーマ作品に気づき易い問題点を入れ込むか否か」
「番組用とはいえ通常あり得ない問題点を仕掛けたニュースになっていいのか」
「仕掛けは議論展開の方向性を意図的に誘導することになる」
「仕掛けをなくして議論もなしでは番組にならない」

■結果

「様々な視点によって内容も異なってくる」ニュースを前提に、チェーンソーを使うなど意外性のある季節ネタ「臼作り」を選択。さらに色々な見方ができるように臼の材料に関する問題にまで踏み込んで取材するよう、記者に指示。実際に「材料のケヤキの木が減ってきている」という社会性のある側面も捉えたニュースとなって、テーマ作品はＯＡされた。

■ワークショップで狙った実践効果

本番のスタジオ収録へ向けて緊張感を解きほぐすためワークショップを取り入れた。メルプロジェクトプロジェクトリーダーの林直哉さん（長野県梓川高校教諭）のアイディアで、生徒と先生にテーマ作品と同じ素材を提供して「紙芝居版ニュース」を作ってもらうことにした。生徒自身がテーマ作品と同じニュースを作ることで視点や構成などの違いを実感し易くなる。さらにワークショップは映像的な変化が狙える上、生徒作品も番組進行上の重要な素材になる…等々。議論を重ね手探りの中でたどり着いたまさに一石何鳥もの効果が期待できる仕掛けだった。

（２）　実施から番組編集まで

■開催日時　2003年１月18日（土）午前10時30分～午後４時
■場所　テレビ信州放送センター（長野市）
■参加者　生徒21名、教師９名　合計30名
紹介番組作りとニューススタジオ作りに参加した学校より、経験者の生徒と未経験者の生徒各１名ずつ参加（一部学校は希望により２名出席）
■内　容
＜第一部＞　ワークショップ「ニュースを作ろう」10時45分～12時20分
○初対面の子どもたちがフランクに討論できるように、ゲーム感覚で取り組んでもらえるよう企画した。
○違う学校の生徒同士が経験者と未経験者に分かれて２人１組の班を作りスタート（先生も別室で体験した）。
○内容はテレビ信州が実際に2002年12月に取材しオンエアした「臼作り」の歳時記を、生徒自身が１分30秒のニュースに仕立てるというもの。

映像のシーンを写真にしたスクリプトカード

ここから６枚を選び紙芝居風に
ニュースの映像要素を構成する

ワークショップ「ニュースを作ろう」
絵の構成を考える生徒たち

記者を臼作りの職人さんに見立てて
模擬記者会見。生徒から鋭い質問も

○取材した映像素材を作業場のロングや職人さんの手元など主なシーンを15のカット（写真）にしてスクリプトカードとして配り、ここから６枚を自由に選び、それを組み合わせて自分たちのニュース（原稿含む）を作ってもらった。
○原稿を書くための情報は記者の取材メモを「情報カード」として配付。また臼作りの職人さんと、材料となるケヤキの木の仕入先、木材センターの所長さんのインタビューは発言全文を記載した「インタビューカード」として配付し、使う情報とインタビューコメントを自由に抜き出してもらった。
○情報カードにない別の情報を取材できるよう、実際に取材したスタッフが職人さんと所長さんに扮して模擬記者会見も行った。

＜第二部＞　討論「ニュースを解剖しよう」12時50分～15時30分
○生徒の作った作品の中から対照的な２作品を実際に映像として編集し、12月23日のニュースで実際にテレビ信州で放送した小島記者の１分30秒の「臼作り」のニュースと対比しながら討論を行った。
○司会はテレビ信州の伊東秀一キャスター（ニュース担当）、コーディネーターはメルプロジェクトメンバーで愛知淑徳大学講師の小川明子氏が担当。
○スタジオで収録した討論には、局側から報道デスクの松岡隆、記者の小島寿一、カメラマンの荒井敬一郎が加わり、生徒からの質問に答えた。

＜第三部＞　「テレビに発言中」15時30分～16時
○日頃テレビについて感じていること、疑問、意見など自由に発言してもらい編成担当者や制作ディレクターも交え、局側と意見交換した。

（第三部を除き、この模様は「ニュースと話そう～子ども番組審議会」というタイトルの55分番組として、２月１日の午後４時から長野県内で放送した）

（３）ワークショップ完成作品の分析

■ニュース作りゲーム班分け

１班（高校生の番組作り経験者）、２班（高校生の未経験者）、３班～６班（中学生の経験者）、

長野プロジェクト

７班～10班（中学生の未経験者）

○情報カードに書かれている情報の中からどこに着目したかで、作品は①臼作りの工程を紹介したもの、②材料のケヤキが減っている林業の問題にスポットを当てたもの、の２つの作品群に大別された。

○ただ①の作品の中にも臼作りにチェーンソーが使われることを紹介した作品と、チェーンソーの絵は一切使わずに手彫りの味を強調した作品があり、多種多様な仕上がりだった。

○ワークショップの目的は同じ事を取材しても、記者の感性や主観によって全く違うニュースができるということを実感してもらうことにあった。当初10本の作品がみな同じようなものになってしまえば討論が展開できないとの心配もあったが、仕上がりは個性あふれるものだった。

○番組作りの経験、未経験による差はあまり感じられなかったが、細部に経験が生きていることを感じさせる部分もあった。（例―６班の作品のようにインタビューのあとにしめコメント（落ち）がある）

＜林業の衰退を訴える作品の代表例＞

６班の作品（番組作り経験者）　中学生

ここは中信地区の木材を販売している中信木材センターです。この木材センターは大きな悩みを抱えています。それは後継者が不足しているということです。

センターの中の様子です。センターの中では９人の職員が働いており、林業関係の皆さんが山離れしているなかで今の現状について所長の桐山さんにインタビューしました

「山の作業は危険なため若い人がいやがるから後継者が不足していて今では外国の輸入が増え国産を上回っています」

一方南安曇郡堀金村でうす職人として働く小林さんもまた大きな悩みを抱えています。今原料のケヤキが年々減っていることです。そこで小林さんに尋ねてみました。

＜うす作りの工程を紹介する作品の代表例＞

７班の作品（番組作り未経験者）　中学生

うす職人の小林さんは南安曇郡堀金村でうすを作る作業をしています。小林さんはうすを作り始めて30年、毎年10月上旬から12月下旬まで作業をしています。

できるのは１日多くて１個か２個、１シーズンでは100個も作ります。うす作りの工程は、輪切りにして外側を電気カンナで整えます。

次に荒彫りにしてもちの入る部分を掘ります。大チョウナ手チョウナで中の形を整えます。最後に丸ガンナで中の丸みを出して完成。

チェーンソーは切るだけでなく、いろいろな場面で使え、小林さんの場合一番効率がいいそうです。

「これから植林をして間に合うものでないのでこれから探す範囲を県外だとかに広めていかないと気に入ったものが手に入らないので余計な経費がかかりますね」

うすの完成品は周りを紙でつつんだ後、十字でしばり、伝票をはりつけて全国に運ばれます。

このような現状の中でも小林さんはチェーンソーを使った独特のアレンジでうすを一つ一つ手作りで作って。林業のよさは若者たちに伝わるのでしょうか。

「木は場所場所によって堅さがちがうんですね。削り込むのにも探りをかけながら削っていきますので気を使います。みなさんどんな風にしてどんな風に食べているかなという気持ちがありながら、仕事を進めているんですけれども、いつまでも大事にしてもらっているかなということはいつでも頭によみがえりながら仕事をすすめていくことになりますね」

（４）子ども番組審議会アンケート結果

■質問

「参加した感想は」

＜生徒＞

○他校の生徒と交流できとても楽しかった。いい経験になった（同回答15件）。

○ニュースを作る大変さがわかった。

○番組を制作するとき、他校の人と意見の食い違いあったが、その家その家のＴＶの見方や評価でかわるものかなと思った。

○同じ生徒なのにとても深い考えを持っているのに驚いた。

○あまりにグダグダで眠かった。

＜先生＞

○番組作りが教育現場と似ていると思った。

○メディアについて討論することを期待していたのでスタジオ収録は少々期待はずれ。

○討論は何を深めて行くのか理解しにくく、消化不良な感じも多少残った。

○子ども達がテレビについて語る機会はもっとあってよい。１回では深まらない。

■生徒への質問

「テレビ（特にニュース）の見方変わりましたか」

21人中　　はい　14人　、　　いいえ　７人

「具体的にどこが変わりましたか」

○ニュースが苦労して作られていることを知った（同回答７件）。

○番組の構成を見たいと思う。

○字幕のタイミングをよくみるようになった。
○何気なく見ていたニュースがなんだか面白くなった。
○ニュースの作り方で伝えたいことが大きく変わる。
○言葉ひとつも練られていることに注目。
○伝えたいことが分かるようになった。

■先生への質問

「番組作り経験者と未経験者の差が見えましたか」

９人中　はい　２人、　いいえ　１人、　どちらでもない　６人

「具体的にお答えください」

○（経験者は）苦労ややりがいを感じたので共感的にとらえている。
○映像を選択する場面を見ていると経験が生きていると思った。

■質問

「番組を見た感想は」

＜生徒＞
○あんなに長い時間の収録が５５分に編集されていたのはすごい（同回答10件）。
○手抜きに見えた。
○「やはりここはカットされた」と思った部分があったが、カットされてしかりと思った。

＜先生＞
○一般の人にはわかりづらい。視聴者に伝わったか不安。冒頭の話し合いが焦点ぼけ。
○同僚や家族からは「難しくて理解できない」といった声が多く残念でした。
○制作者によって様々な伝え方があることがよくわかる構成だった。

（５）考　察――「番組」と「実践」の両立

「企画段階から携わった私たちが見てどうこうではない。初めて見た一般視聴者は何を狙った番組なのか分かりづらいのではないか。構成的にも難しすぎる」「通常の番組構成という視点で捉えるのではなく、これまでニュースの中で伝えてきたメディア・リテラシーの実践結果として見れば画期的な番組だ」

編集が上がったばかりのＶＴＲを見た「メディア・リテラシー推進プロジェクト」のメンバーが、番組の捉え方を巡って感想と意見を交わした。次年度の糧にするためにも番組に対する評価は下さず論議を継続することにしている。

■驚かされた生徒たちの能力

収録本番に向けたウォーミングアップのつもりで仕掛けたワークショップでの驚きがあまりにも大きかった。約１時間の制限時間内に１分30秒のニュースを作る（「作る」表現に抵抗あるが…）。初めて顔を合わせた２人１組を原則にしたチームで「できないチームが出て当たり前」の予想は見事はずれ、10の全チームが完成させた。

この驚きが逆に番組構成に少なからずインパクトを与え、「従」の部分が「主」と同列の扱いになり、分かりにくさを招いてしまったのかもしれない。

■作ることで実感するリテラシー

同じ素材でありながら「切り口」が異なった。大別して①林業・自然環境、②臼づくり工程、と視点は２通り。だが「臼づくり工程」というスタンダードな作りの中にも「チェーンソーを使う意外性に焦点を当てた作品」と「チェーンソーのカットをまったく使わず手作りの温もり伝えたかったという作品」に分かれ、扱い方にも結構違いがあった。

特に注目した経験者と未経験者の差はそれほど明確に現れなかったが、比較対照の中で選んだ作品では「林業の問題に踏み込んだ」のが経験者チームで、未経験者チームは「臼作り工程を紹介」していたことが象徴的だった。

「作り手の見方で同じニュースでも内容が違ってくる」ことを体験した生徒たちは、共感的にニュースを捉えながらも「作ることで実感するリテラシー」を学んだと思う。

■番組的にどう昇華

テレビ信州は、初年度使うことを意識的に避けてきた「メディア・リテラシー」を、今年度あえて積極的に使ってきた。耳や目にすることが次第に増えて来ているメディア・リテラシーを、テレビ信州の取り組みと連動した「市民権」を得た言葉にしたいという戦略的意図がある。

その意味合いでも、今回のような番組制作は意義深かったと総括している。ただ、ほとんど知られていない実践活動をいかに番組として昇華させられるのか。これからのコンテンツだけに試行錯誤は続くが、今回の番組で多くの子どもたちが「楽しんで面白がってくれた」こと、メディア・リテラシーの必要性を認識し何らかの取り組みを継続したいとする先生たち。番組素材として決して悪くないと実感した。

３　　２年間の全体総括

３－１　プロジェクト実践を経て、送り手２年間の総括

テレビ信州 平坂雄二

■局メリットに「見巧者」の例え

「見巧者（みごうしゃ）」という言葉がある。「広辞苑」には「モノの見方が上手なこと。また、そういう人」と載っている。意味は読んで字のごとくだが、主に歌舞伎などで使われ、この「見巧者」の存在が役者を育てるのだという。

民放連のメディアリテラシー・プロジェクトに取り組むことで活字メディアからの取材が多くなった。「子どもたちが番組作りを通してテレビの特性を学ぶことと、テレビ局としてのメリットはどう結びつくのか」――必ずといっていいほど投げ掛けられる質問に対してかなりキザっぽく、この「見巧者」を例に挙げる。受け売りなのだが、かなり正鵠を射ていると思う。

「賢い視聴者、まさに『テレビの見巧者』を育てることが、質の高い報道姿勢や番組作りを目指すことに通じる」と。

■「送り手」のリテラシーから始まった

テレビ信州のメディア・リテラシーは「送り手側」から始まった。検証番組をはじめとして舞台や映画に結びついて行った「松本サリン事件」(1994年)での慎重な報道がクローズアップされているのだが、原点はそれ以前の「富山長野連続女性誘拐殺人事件」（1980年）にある。典型的な冤罪事件だったが、地元のマスコミとして事件報道の検証もできなかった苦い経験と反省、自己分析が伏線となり「松本サリン事件」に対するテレビ信州の報道姿勢――裏の取れない情報は報道しない――に生かされたといえる。

報道をベースにこうした「送り手」の側に立脚したメディア・リテラシーは、その後、子どもたちとのかかわりの中で「受け手側のリテラシー」と密接に融合してきた。「松本サリン事件」の報道姿勢に疑問をもった県立松本美須々ヶ丘高校放送部が、県内のマスコミを対象に行った取材に、テレビ信州は積極的に応じた。「テレビ局の責任として、高校生にテレビへの不信を抱かせたままではいけない」（倉田治夫取締役総務局長・当時報道部長）との思いが背景にあった。

当時としては極めて異例の対応だったと思うが、この延長線上にテレビ局と地域の学校を結びつけた民放連プロジェクトが据えられ、テレビ信州のメディア・リテラシーは一気に具現化して加速した。

■グレードアップした「普段着」

民放連プロジェクトの実践に当たってテレビ信州は、息の長い活動を見据えて「普段着のメディア・リテラシー展開」を基本姿勢に掲げてスタートした。いや、そのはずだったが、対象は初年度の延べ５学校・団体から、２年目の2002年度には10の中学と高校に拡大した。初年度に引き続き実働部隊は報道部。それだけに「良くできるね」「どうやっているんですか」。驚きを込めた

疑問符が、最後には「それは大変ですね」と、同情に変わって行く。
　ローカル局の態勢は多かれ少なかれ似かよっているだけに、これが実情を知る関係者の大方の反応だった。

■新たな展開促した民放連プロジェクト

　その反応は正しく、まさにぎりぎりのところで踏ん張ったというのが正直なところだが、一方で民放連プロジェクトを一つの契機にテレビ信州のメディア・リテラシー環境は整えられた。初年度、報道部だけにとどまっていた活動は、編成、報道、総務の３局で構成し７月に発足した「メディア・リテラシー推進プロジェクト」(リーダー・百瀬博久編成局長、10人)を駆動輪に全社的な取り組みへと発展、新たな展開を生んだ。

　その一。放送番組審議会のテーマにメディア・リテラシーを掲げ、東京大学大学院情報学環助教授・水越伸氏を招いた。番審に外部から講師を招くことは画期的なことだったが、「テレビ局に今なぜメディア・リテラシーなのか」などについてお話し頂き、経営陣含め番組審議委員に“認知”された意義は大きかった。
　その二。すでに今年度の活動で触れたが、メディア・リテラシー推進プロジェクト制作の番組「ニュースと話そう～子ども番組審議会～」。テレビ信州としては、こうしたプロジェクトチームが番組を制作した初のケースとなった。

■アイデンティティーへの素材

　「送り手」と「受け手」。両極を行き来し、それぞれの立場が体験できるメディア・リテラシーは、社員教育にも有効な手段になりうることを実証した。が、それ以上に２年間にわたる民放連プロジェクトで得た収穫は、テレビ信州のアイデンティティーを確立する一素材としてのメディア・リテラシーが、ある種明確に見えてきたことである。
　キーワードは、まさにその時代を今年迎えるデジタル化の特長「双方向」。番組作りの「出前授業」は学校から公民館などへと底辺を広げ、制作された番組を発表する場としての放送枠を提供するパブリックアクセス……。
　メディア・リテラシーを支援するテレビ局、日本の「チャムテレビ」（トロント）を目指し、テレビ信州は今、その入り口に立ったと実感している。

３－２　プロジェクト実践を経て、受け手２年間の総括（中学校）

丘中学校　小林清美

この２年間に、長野県メディアリテラシー研究会とテレビ信州の援助を受けて、中学生がテレビ番組を作るという経験をさせていただいた。他の中学の先生も同様だと思うが、初めて話があったときは、「できるのか？」という不安が先にたった。しかし、林先生の「遊び感覚でいい」という言葉を聞いて「やってみるか」という気になった。そして３回のテレビ番組作りをすることになった。以下、その結果をまとめてみた。

Ⅰ 得たもの

１ 経験

(1)この２年間で放送局の指導を受けながらテレビ番組作りに取り組んだ中学校は、７校を数える。それまでにはなかったプロの指導を受けられたという点で、画期的ではなかったかと思う。このような経験ができたこと自体大きな成果だと言える。

(2)経験したことの内容を、中学生の立場から詳しく見てみると

①テレビの特性という講義を受けられたこと

そのなかでは１つの映像に対し、２つの異なったＢＧＭを付けてみることで、音響効果の実際を知ることができた。また、ライトの当て方によって雰囲気が変わること、いくつか取材した映像の中で実際に使われるのはその一部だということなどを学んだ。さらに、テレビ信州の実際のスタジオをその裏側まで撮影したＶＴＲをみることができた。

②セット作りの経験ができたこと

本年度は、丘中らしいセットを作ろうと考え、塩尻市の特産物であるぶどうをモチーフにしたものを考案した。夕焼けと北アルプス、ぶどうは風船を膨らませて立体感を出した。もう一つのサブセットは丘中の校章にもデザインされているすみれをモチーフにしたものになった。いずれも美術科の先生に多大なる援助を受けた。風船の中にぶどうの香りを閉じ込め、本番で割ってテレビ信州のアナウンサーを驚かすという試みは大成功した。

③３分間の番組作りを通して、自分が本当に伝えたいことは何なのかを考え直すことができた。

④総合的な学習の成果を発表するのにＶＴＲという新たな手段を手に入れた。

⑤生放送の本番に出演し、緊張感を味わうとともに、自分の考えなどを言えたこと。

２　発信者としての立場の見直し

このようなことをする動機となったことは「総合的な学習」に関わるようになってからだ。総合的な学習の大まかな流れは①下調べ、②調査研究、③伝えたいことのまとめ、④発表であるが、発表の部分では、従来から模造紙にまとめて展示するというスタイルがほとんどであった。しかしこれは労多くしてなんとやらで、しっかりと読んでくれる人は少ない。生徒はもちろん職員も丁寧に読んでいる時間もないのが現実の姿ではないだろうか。そこで、みんなに発表する段階で何らかの工夫が必要である。思いついたのがＶＴＲにまとめて全員の前で流すという形である。だがＶＴＲに記録したことをだらだらと流すことはできないので、どうしても伝えたいことを明確にし３分とか５分にまとめなければならない。ここで２つの新たな課題が生まれた。①限られ

た時間の中で何を伝えたいか、伝えねばならないのかを真剣に考えること。②効果的なＶＴＲ作成のために、撮影、編集などの技術的な面を強化しなければならないこと。

Ⅱ　課題として残されたこと

１　放送局とタイアップして番組を作る経験を積み重ねるという点で

・そのような機会はあまりない。一度経験すると二度目のチャンスはめったにない。

・放送局はテレビ信州だけではないから、他のテレビ局にも呼びかけてチャンスを多くするべきである。広がり、深まりを目指していくべきである。

２　校内で放送番組を作るという活動について

・現状では施設、設備、職員の技術などが不十分である。また他の職員の意識改革が必要であり、メディアリテラシーの重要性を研修する機会を持ちたい。

・生徒会放送委員会、総合的な学習などの時間で実施するのが現実的だが、時間の制約はかなりきつい。休み時間、放課後の活動にしては余りある。

３　メディアリテラシーを中学校の学習活動に組み込むことができるかという点で

・中学校の教育課程は、学校長の判断で決めることができるが、国語、数学などのほかにメディアについて学習する授業を設定することは難しい。文部科学省、県レベルの教育委員会などの判断が必要である。ここに対しても強力な働きかけが待たれる。

・各教科学習の中でメディアに関する学習をすることは可能であるが、いくつかの新聞を読み比べるという程度であり、テレビ番組を作るという時間のかかる内容はどの教科も足踏みする。

・「総合的な学習の時間」で、ほそぼそと行うのが現実的かと思われる。

以上、メディアリテラシーに関する活動にかかわった経験から考えたことを書いてみた。今後は諸外国の報告に見られるように学校教育の中に意図的に組み込まれていくように、関係する様々なグループと協力しながら、運動を進めていかなれればならない。

３－３　これからの展開について

武蔵工業大学第二高等学校　河野通俊

■プロジェクトとの出会い

平成12年度に設立された「情報マルチメディア科」は、工業高校としての伝統である“エンジニアリング”に、“アート”の要素を加えた新しい学科である。ＣＧ（コンピュータ・グラフィックス）、音楽、ゲーム、Ｗｅｂデザイン、アニメーション制作など、マルチメディアを使って自己表現のセンスを磨くための授業が行われている。

第１期生である３年生は、これまでの作品制作の次の段階として動画編集を学習することになっていた。偶然テレビ信州が民放連のパイロット事業に取り組んでいることを知り、テレビ局のスタッフから直接指導してもらえるということもあってプロジェクトに参加したいと考えた。

■テレビ局とのつながり

生徒の企画案の一つが選ばれ、プロジェクトに参加できることになった。

テレビ局のスタッフが来校し番組作りを指導､逆に学校側がテレビ局へ出向きテレビに生出演、スタジオなどの設備を見学する。また、本校の作品は６月に続いて12月にも放送されたのだが、２回目に放送する作品を選考するために行った校内コンテストには、テレビ信州のスタッフにも審査に加わってもらった。作品が放送されることにより社会からの評価も得られる。また、設立して間もない本学科の取り組みを、テレビを通して紹介できたことも成果であった。

テレビ局と学校という、これまでそれほど親密な関係になかった両者が共同で作業をすることによって、我々はメディアを身近に感じるようになった。

■これからの展望―「日本版　パブリック・アクセス」

プロジェクトに参加して、来年度以降の展望が持てたことは大きな収穫である。

アメリカでは、一般市民がケーブルテレビ局に自作の番組を持ち込んで放送してもらう「パブリック・アクセス」という制度が普及しているそうだ。ここではその「日本版」とでも言おうか。

生徒たちがテレビ局のスタッフによる指導を受け、テレビの持つ特性を理解した上で番組作りに取り組む。完成した作品をテレビ局で放送してもらう。「テレビ局に認めてもらえるような番組を作りたい」という制作意欲を引き出すことができれば理想である。

生徒の取り組む姿勢を見ながらではあるが、来年度以降数年間は今年度行った「コンテストで代表作品を選考する」ことをベースに授業を進めたいと考えている。そのためにはテレビ局の協力がなければ成し得ない。これからもお互いに良い関係を築いていきたい。

３－４　メルプロジェクトとしてのまとめ

メルプロジェクト　林 直哉

■総合的に行う・組織的に組み込む

この報告の初めでも触れたが、長野での実践は、テレビ信州が行ってきた送り手のメディア・リテラシーの実践に私たちが提案した「メディア・リテラシーを軸にしたマイチャン計画」が盛り込まれた形で進んできた。そして他局に先駆けて「メディア・リテラシー推進プロジェクト」が組織され、総合的な観点で局の運営に食い込む取り組みに発展している。民放連プロジェクトから委託を受けた実践はもちろんのこと、戦略的に「マイチャン」（局キャラクター）を全面に出した局イメージ向上から番組審議会における新たな試行まで､局の行う数々の企画の根っこに｢メディア・リテラシー」という営みが脈打ち始めた。

しかし、メディア・リテラシーを「はやり言葉」や一時のブームにしてはならず、局のアイデンティティとして全面に押し出すテレビ信州には、情報の送り手と受け手のコミュニケーションをあるべき姿に戻していく営みと正面から向き合い、メディア・リテラシーが持つダイナミズムを活かし実践を積み重ねていっていただきたい。

このような基本的な立場を示した上で、今回の２年間の成果と課題を列挙する。

■研修会（学習会）

テレビ信州が行った数々の実践の中で、２年間で３回の局研修会（３回目はメルプロジェクトと共催）を実施したことが特筆できる。この研修は下記のように行われた。

第１回目　「メディア・リテラシーとは何か　概要と系譜」〔講師〕水越　伸・林　直哉
メディア・リテラシーとは何か。どのような系譜で語られ、なぜテレビ局に必要となったのか。概論として提示したあと、地方局において何が必要でどのような可能性を持っているか意見交換を行った。

第２回目　「民放連プロジェクトの可能性」〔講師〕山内祐平・林　直哉
民放連プロジェクト１年目に行われている東海テレビの事例を提示したあと、この取り組みが単に学校の先生や生徒のために行われているのではなく、参加した局の関係者に大きな「学び」を提供していることを確認した。研修としての可能性の意見交換も行った。

第３回目　「送り手のメディアリテラシー・ワークショップ」（メルプロジェクトと共催）
〔メルプロジェクトより境真理子、菅谷明子、林直哉、水越伸、劉雪雁、坂田邦子、上杉嘉見が参加〕
　メルプロジェクトと共催で、民放連プロジェクト４地区の取り組み内容を提示しながら、テレビ信州がメディア・リテラシーを機軸にどのような実践を行えるのか、ワークショップ形式の意見交換を２日間にわたって実施した。

実践と共にこのような研修会を重ねることで、メディア・リテラシーに対する局内関係者の認識も深まり、局の実践と理念が有機的につながっていったところに発展の芽が生まれたと思われる。

■残された課題

一方、残された課題もある。これまで局・学校側で触れられなかった点について挙げる。

○脱しきれない固定観念

実践に携わった担当者が、「自由な子どもの発想を活かしたい」「自由にフラットに進行して、誘導したくない」などと語るのをよく聞く。子どもたちや学校・授業といったものに対する様々な固定観念がある。例えば「金髪で不思議な言葉を使い、部屋が汚い・・等」マスメディアがおもしろおかしく作り上げているイメージもあれば、いざ授業となると「極端に言えば、厳粛で神聖な場に汚れなきまっさらな子どもたち」というようなイメージになってしまう。私たちが社会の中で「メディアによって構成される」ように、子どもたちもまた同様に構成されていく。

子どもたちは、発達段階に見合った奇想天外さと不自由さを持っている。しかし、その特性も年々広がりが小さくなっており、表現の手段や方法もパターン化してくる傾向がある。まさにその影響としてマスメディアや子どもたちの生活習慣があげられているのだ。今回の企画は、主に放送局を開く試みとして行われたが、私は学校を開く一環としてこの企画の意義を強く感じていた。立場の逆転を起こし学校という場をテレビメディア関係者にとらえ直してもらいたかった。その初期的な段階の成果はあったが、いわゆる「学校」や「子ども」に対する固定観念の根は深い。教育現場に携わっている関係者ですら現在の子どもたちをとらえることが難しい中で、学校に出向いて授業をしていく局担当者が「構成されてきた学校や教育観といった固定観念」から、

抜け出ることが難しいかもしれない。しかし、このような実践を続けていくためには、実践の初期段階で「子どもたちに対する接し方」を獲得する仕掛けをつくる必要性とお互いにこのような固定観念を持っていると認識した上で共同する必要性を痛感した。

〇コーディネーターとカリキュラムの必要性

学校教育の中で外部講師（ゲストティーチャー）の活用が盛んに唱えられているが、今回のような実践ではコーディネーターの必要性が再認識させられる。長野県メディア・リテラシー研究会のメンバーが各校の実践にアドバイザーとして参加する体制をとったが、局側の担当者の遠慮から初期段階で十分に機能しなかった。しかし、局担当者が当然抱える「どこまで私たちが手伝って良いのか、どこまで教えて良いのか」という戸惑いや学校側の同様な不安を差配していくためにも､放送局と学校現場双方に理解があるコーディネーターを養成し増やすことが必要である。このような異なった組織のノウハウを融合するためには、最重要課題であろう。

同時に「番組制作入門」に対する体系的なカリキュラムの必要性も感じた。「番組制作」と一言でいっても、そこに費やせる時間によって獲得するスキルの深さは違う。費やせる時間とスキルの深さを、大まかにしかし体系的に示したカリキュラムが求められている。特に、マルチメディアである映像に関しては、テーマ設定から作品完成までの過程を体系的に提示し、その節目節目で陥りがちな問題点を整理したハンドブックや指導書の作成が急務である。この実践によって残された課題に対して、研究団体側が応えていかなくてはならない課題が多い。

４　　来年度以降の計画について

テレビ信州　百瀬博久

今年度は、昨年７月に立ち上げたＭＬ（メディア・リテラシー）推進プロジェクトを中心に全社的に活動を展開してきた。特に民放連プロジェクトの最終年度に当たり、中学・高校10校での実践、さらに当初計画にはなかった番組制作等、拡大基調の活発な活動となった。

こうした２年間の民放連プロジェクト展開で蓄積したノウハウをベースに、新たな実践を含めて来年度以降も活動を継続したいと考えている。テレビ信州としての受け皿の問題もあるが、以下のように多角的な「テレビ信州モデル」を計画している。

１）　「出前授業」の深化と拡大

〇深化＝民放連プロジェクトの実践校の中から、希望する学校で継続する。

〇拡大＝新たに取り組みたい意向を持つ学校を対象とする。

※次年度も県教育委員会の後援を得て実施するが、対象は、合わせて高校２校・中学校２校程度にする予定。

2）公民館との連携

学校から地域へと活動範囲を広げる。まず市レベルの公民館と連携、記者、カメラマンが公民館に出向き「出前授業」を開く計画。メディア・リテラシーを公民館活動に組み込めるかが課題となるが、同授業で制作した作品を放送するなど、パブリックアクセスを推進したい。現段階では、１地区を予定。

3）大学との連携

長野県内の短大・大学・大学院へのアプローチを図る。東京大学大学院情報学環メルプロジェクトのアドバイスは引き続き頂きたいと考えているが、地元大学との協働は今後の発展を図る上でも欠かせない展開と位置付けている。

4）メディア・リテラシー教材の開発

メディア・リテラシーを支援するテレビ局として、これまでの実践を踏まえ「実学」に立脚したテレビ信州独自の教材の開発を行う。

メディア・リテラシー活動は、よく「強壮剤にはならないが、漢方薬だ」と言われる。テレビ信州では、これまでと同様「普段着」の取り組みで、活動自体を日常的なものと受け止めている。しかし一方で、メディア批判やデジタル化など、テレビが抱える今日的な諸問題に正面から立ち向かえるコンテンツとして、メディア・リテラシーを位置付けている。